

---

## 「農学英语」のための最適で効果的なカリキュラム開発

---

研究代表者 垣口 由香  
共同研究者 吉村 征洋

教養教育改革に伴い、2026 年度より瀬田学舎の必須英語科目「英語総合 3 / 4」においてトピック選択制が導入される。本プロジェクトは、トピックの一つである「農学英语」の開講に向け、最適かつ効果的な ESP (English for Specific Purposes) カリキュラムの開発を目的として実施したものである。従来の EGP (English for General Purposes) 型授業から、農学という特定領域に焦点を当てた ESP 型授業へ転換することで、学習者の目的意識の向上および専門的英語運用能力の育成を図ることを目指した。

本年度は、当初計画に基づき以下の取り組みを実施した。

まず、①農学 ESP に関する国内外の先行研究の精査を行い、ESP 教育の理論的枠組みおよび実践事例の整理を行った。これにより、本学に適したカリキュラム設計の基盤を構築した。

次に、②本学農学部の学生および教員を対象とした英語ニーズを把握するため、質問紙調査の設計・作成を行った。調査は学生用および教員用の 2 種類の質問紙を作成し、それぞれに自由記述式の設問 1 項目と、5 件法のリッカート尺度による質問項目（学生 14 項目、教員 12 項目）を含めた構成とした。質問項目の作成にあたっては、学外の ESP 研究者から助言を得ることで、内容の妥当性および精度の向上を図った。

続いて、③作成した質問紙を用いてニーズ調査を実施し、収集データを記述統計により分析した。その結果、学生・教員ともに農学分野における英語の必要性を高く認識しており、特に教員の認識が一貫して高かった。一方で、学生は英語力に対する自己評価が低く、必要性を認識しつつも自信を持っていない傾向が見られた。以上の結果は、農学 ESP カリキュラムの必要性を裏付けるものであった。

④分析結果を踏まえ、農学 ESP カリキュラムの構築に着手した。専門分野における英語の必要性が高く認識される一方で、学生の低い自己効力感が課題であることを踏まえ、専門性とともに学習者の自信の育成を重視した設計とした。具体的には、「農学英语」として専門語彙の習得と段階的な英語運用能力の向上を図る内容とした。

また、⑤ESP 分野における知見の深化および外部からの評価を得るため、2026 年 2 月に第 22 回 CamTESOL Conference において EAP and ESP (EAP) 領域で研究発表を行った（於カンボジア工科大学、“From EGP to ESP: Designing English Curricula for Agricultural Science Students in Japan”）。これにより、国際的視点からの示唆を得ることができ、今後のカリキュラム改善に資する成果を得た。

加えて、⑥2026 年度開講予定の「農学英语」で使用する教材の準備として、本学農学部生に特化した英単語帳の作成に取り組んだ。ただし、本教材については予算執行期間内での完成には至らず、引き続き作業を行い授業開始までに完了させる予定である。その他、並行して、リーディングとリスニング用教材、および動画作成用教材を作成している。

以上の取り組みにより、本プロジェクトの当初計画①～⑥については概ね実施することができた。今後は、本年度の成果を基に授業実施・検証・改善を行い、より実効性の高い農学 ESP カリキュラムの完成を目指す。